

疑似法助動詞と法助動詞の意味的相違

—— 文法化の観点から ——

黒 滝 真理子

1. はじめに

いわゆる「文法化」とは内容語（具体的な語彙的意味）から機能語（抽象的な文法的意味）を派生する変化を表す。この変化には構造的な変化と意味的な変化がある。構造的な変化は生成文法的観点から説明されることが多いが、本稿では意味的な変化に焦点をあて、疑似法助動詞を素材として認知言語学的観点から観察してみたい。

英語の法助動詞（モダリティ）には力動的モダリティ・束縛的モダリティ¹・認識的モダリティ²といった下位カテゴリーがあり多義である。たとえば、Traugott, E.C. and Dasher, R.B. (2002)によると、mustは、古英語では「許可」を表す本動詞 *motan* が「義務／強要」の意味を表すようになり、中期英語ではもっぱら「義務／強要」を表す用法の頻度が増し、15世紀には「許可」の意味が失われ、やがて *motan* の過去形から生じた *must* が使われるようになった。「必然性」を表す認識的モダリティは初期近代英語になって勢力を及ぼしていった。*must* をはじめとする英語³の法助動詞には束縛的モダリティから認識的モダリティへの通時的意味変化が見られる。法助動詞は文法化が進んでいるため、現代では語彙的意味よりも文法的機能が際立っている。

では、疑似法助動詞の文法化はどうであろうか。be going to の文法化は、「時空間メタファー」(Sweetser 1990) の観点から説明されることが多かったが、

実はメタファー (metaphor) のみならず、メトニミー (metonymy) も関わっている (Dirven and Pörings 2002; Barnden 2010)。本稿では、疑似法助動詞の文法化の過程で両者がどのように関わってきたのかをみてみたい。それによって、be going to では、なぜ go 以外の移動動詞が使えなかったのかを明らかにする。また、動詞 + to 不定詞が疑似法助動詞として再分析される文法化の過程でメタファーとメトニミーが起こったことで、疑似法助動詞特有の意味が派生したことに触れる。Bolinger (1977) の提唱する “different forms, different meanings (形式が異なれば意味も異なる)” ということばの基本理念によれば、疑似法助動詞 be going to と法助動詞 will の間に意味的相違があることは理にかなっているが、本稿では、be going to になぜ will との意味的相違があるのかについての説明的妥当性を文法化の観点から見出してみたい。さらには、文法化と事態把握の関連性も考察する。

2. モダリティ (法助動詞) のメタファーとメトニミー

まずは、メタファーとメトニミーについて整理しておこう。

メタファーは異なる2つの概念領域から似ている点を見出す機能であり、メトニミーは同じ概念領域内で繋がっているものから、認知的に際立つものを指示する機能をいう。因みに、メタファーの類似性 (similarity) やメトニミーの近接性 (contiguity) という分類は伝統的なものである⁴。

具体的に述べると、メタファーの最も重要な機能はある概念 (起点領域) と他の概念 (目標領域) を対応付けるものである (Lakoff and Johnson 1980)。この対応関係を理解する動機づけは経験基盤主義である。容器に水を入れればその量が増えるといった経験によって生ずるものであるので、“MORE IS UP” のようなメタファーが理解できる。

それに対して、メトニミーの代表的な説明は、Langacker (1993) の参照点能力に基づくもので、認知的な際立ちが高いもの (参照点) から低いもの (ターゲット) へとアクセスするという認知作用の点から説明される。具体的に述べると、空間的繋がりを示す容器と中身の関係 (例えば「鍋を食べる」「やかん

が沸騰した」など）、主従関係（例えば「赤ずきん」は物語の主人公である少女（主体）が赤ずきん（従属物）を身に着けていることから、その赤ずきんで少女を指す）、時間的繋がりを示す因果関係（例えば「唇をかむ」で「悔しい思いをした原因が結果として悔しさをこらえるために唇をかむ」を表す）や継起関係（例えば「筆をとる／置く」「口を開く／閉じる」や「治療する」を表す go to hospital）などがある。

まとめると、メタファーは二つの領域間である概念を別の概念に対応させることで別の概念を理解する認知プロセスであり、一方、メトニミーは一つの領域内にある概念から他の概念へ心的アクセスを行うことで別の概念を指示する認知プロセスである。

ここで、モダリティにおけるメタファーとメトニミーをみてみよう。

Sweetser (1990) は、モダリティの多義性がメタファー的写像によって起こることを論じている。Sweetser (1990:57-64) は must に関して(1)の例をあげて説明している。(1) a は母の権力が主語 you に対し10時までに帰宅するように強いていることを表し、(1) b は入手できる証拠に基づいて、you が家にいたことを結論付けていることを表す。その際、話し手は結論に導くような前提となるものを認識していることになる。主語に対する社会的な力や物理的な力が作用する起点領域 a と、話し手の推論により認識的な力が作用する目標領域 b との間にメタファー的写像関係が成立する。宮下 (2008:620) も「Sweetser (1990) による、メタファーによる変化の説明がある。これは「せねばならない」という社会・物理的な意味領域が、類似するスキーマを持つ認識的な領域へと転用されたと説明される」と述べている。つまり、現実世界における外的・社会的・物理的な力が作用する義務的 must から、話し手の内的な推論世界における心理的な力が作用する認識領域へとメタファー的写像がおこり、認識的用法の must が生じるというわけである。

(1) a. You must come home by ten. (Mom said so.)

“The direct force (of Mom’s authority) compels you to come home

by ten.”

- b. You must have been home last night.

“The available (direct) evidence compels me to the conclusion that you were home.” (Sweetser 1990:61)

Sweetser (1990:62) は(2)のように will の例もあげている。

- (2) a. John *will* come.

“The present state of affairs will proceed to the future event of John’s arrival.”

- b. (hearing phone ring) That *will* be John.

“My present theory that that is John will proceed to future verification/confirmation.”

(2) a の will は現実世界における力が作用し未来に到着することを表しているが、(2) b では確証や裏付けといった話し手の心理的な力が作用し、現在の推論を表す will へとメタファー的写像が起こっている。

一方、モダリティ表現におけるメトニミーといえば、「今日は暑いですね」のような依頼を表す間接発話行為がある。これは間接的に意図をほのめかすものであるが、そこに語用論的推論が働くと、“Could you open the window? (窓を開けて下さいますか)” というように依頼へとアクセスできる。その際利用される知識構造は依頼というフレームである (Croft1995)。Croft (1995) はフレームという領域における焦点化の観点からメトニミーを分析している。この場合、暑いから窓を開けるという因果関係が示されているので、時間的なメトニミーといえる。

3. 時空間メタファー

本稿の目的は、疑似法助動詞の文法化のメカニズムについて論じ、疑似法助

動詞 be going to と法助動詞 will の意味的相違を文法化の観点から説明することにある。be going to の文法化は「時空間メタファー」の観点からよく説明されるので、まずは「時空間メタファー」に触れておこう。

Sweetser (1990) は空間表現から時間表現が生じる⁵「時空間メタファー」を唱えた。たとえば、(3) a は空間移動を表しているが、(3) b は approach という移動を表す動詞によって時間の経過が示され時間表現になっている。空間というドメインから時間というドメインへの写像 (mapping) といった「時空間メタファー」が起こっている。

- (3) a. We are approaching Kyoto. (まもなく京都です。)
b. We are approaching Christmas. (もうじきクリスマスだ。)

日本語にも(4)の「ところ」のように「時空間メタファー」の表現はある。

- (4) a. あそこは若いカップルが行くところです。
(この「ところ」は「場所」に置き換えられる空間表現である。)
b. ちょうど出かけるところだ。
(この「ところ」はアスペクト的意味を表す時間表現である。)

Lakoff and Johnson (1999) が「人間はメタファーを介して時間を経験できる」と述べているように、従来の「時空間メタファー」は時間の動きに着目してきた。以下の(5) a もクリスマスが近づいてくるというように、時間が動いている。その一方で、本多 (2011) のいう「移動する話し手からの状況の見え」であるといった捉え方もある。すなわち、認知主体である自己の移動を認知しているということである。時間を経験している主体が関与しているのである。(5) a の時間移動でも実際に移動しているのは自己であり、その移動している自己にクリスマスが近づいていることを表していて、「時間移動」と「自己移動」は一元化できると本多は述べている。これを、本多は「ME 一元論」⁶と称する。

- (5) a. Christmas is approaching. (時間移動)
 Kyoto is approaching. (架空移動) 本多 (2011:41)

「時空間メタファー」のメタファーは概念領域の写像であり、確かに意味拡張といえよう。しかしながら、機能的・語用論的観点から捉えると、意味拡張というよりもむしろ文法化 (grammaticalization)⁷ の観点から説明したほうが妥当である。事実、宮下 (2008:620) も指摘するように、「この (メタファー) 説は起点と目標の意味の類似性を指摘するのみで、どのようにこの変化が起こったのかという具体的なプロセスについては全く問われないという点で」更なる考察が求められるところである。

4. 疑似法助動詞 *be going to* の文法化

「時空間メタファー」の代表例である疑似法助動詞 *be going to* において、空間移動を表す本動詞 *go* が出来事としての時間性を帯びていく文法化の過程をみてみよう。

I'm going to school tomorrow. の *am going* は *go* の進行形で、手はずや準備が整っているから近い将来に起こるであろう近未来を表している。この「行く」を表す *go* の移動動詞に目的を表す *to* 不定詞が後続し、*be going to* というコロケーションで頻繁に使われ般化していくうちに、もともとの「行く」という意味が希薄になり漂白化⁸ されていった。[*be going* + 目的を表す *to* 不定詞] の形式によって、目的は未来に実現するであろうという語用論的推論 (pragmatic inferencing) が生じる。例えば、*I'm going to work harder this year.* は「もっと一生懸命働くために行く」というように、*to* 不定詞の副詞的用法が認知的に際立ち焦点化されメトニミーが働いている。それが「もっと一生懸命働くことを今年こそは実現させよう」といった意味にまで変化する。このように、*be going to* がコロケーションで頻繁に使われ般化していくうちに未来を表す文法マーカの疑似法助動詞が現れる。これは、*be going to* という句の内部構造が組み替えられ、疑似法助動詞として再分析された結果といえ

る。すなわち、*am going* と *to work harder* が一つのコロケーションであったが、やがて *am going to* と *work harder* というように内部構造が変わったのである。再分析は隣接性を想起させる、いわゆるメトニミーである。「もっと一生懸命働く」という出来事が、その直後に起こるのであろう出来事、すなわち「今年こそは実現させる」を表すようになる。これはまさに時間的な隣接性に基づくメトニミーである。

従来意味変化の重要なメカニズムとしてメタファーがよく取り上げられてきたが、フレーム意味論の台頭によりメトニミーも注目されてきた。Moore (2006) は、移動には必然的に時間が伴うので、時間概念は起点領域のみならず目標領域にも存在すると述べ、時間メタファーを領域間の写像とは考えず、フレーム間の写像と考えるべきであることを提唱している。因みに、Moore のいうフレームは Fillmore (1982) のいうフレームのことであり、ある概念を理解するうえで前提となる知識構造のことをいう。フレームの観点から考えると、限りなくメトニミーに近いものであるといえよう。

ここで、*be going to* の文法化において、メトニミーとメタファーがどのように関わっているかを、“*I’m going to work harder this year.*” の例文を取り上げ、段階を追ってみたい。

第1段階は文法化する前段階で、*go* の進行形 *be going* によって「行っている」という物理的な移動を表し、*to work harder this year* のように目的用法の *to* 不定詞が後続する。

第2段階では、使用頻度が高まるにつれ般化していき、隣接する語の間で再分析 (reanalysis) が起こり、話し手は目的地へ移動することで目的地自体を示すようになる。隣接する語同士の再分析なので、この過程においてはメトニミーが働いていて、「行く」という動作が目的地や意図を表すようになる。この第2段階から起こる再分析とは語のチャンクが変化することをいう。目的用法の *to* 不定詞の後に *work* のような行為を表す動詞が続いているのが、やがて *like* のような状態を表す動詞をも後続するようになる。たとえば、*I’m going to like him.* は「私は、彼を好きになるために行きつつある」とは解釈

されない。よって、*I'm going/to like him.* のようなチャンクではなく、再分析が起こり未来を標示する文法的要素として定着し *I'm going to/like him.* というチャンクで解釈されるようになる。

第3段階では、「目的地への移動」という概念によって、未来の出来事や意図を示すメタファーが機能する。*I'm going to work harder this year* (今年はもっと一生懸命働くつもりだ) というように、もはや物理的な移動ではなく、未来の行動を意図する。

第4段階では、*going* と *to* が縮約されることで、音韻的にも形式的にも語と語とのつながりが強化され、*be going to* が疑似法助動詞としての地位をより確かなものにしていく。さらに、*work* のような行為の意味特性を持つ動詞しか受け入れてこなかった *be going to* が、類推 (analogy) によって *like* のような状態動詞などの他の動詞も後続するようになり拡大していく。*like* のような抽象的な領域である他の動詞にまで適用範囲が拡大し受け入れられ別の領域へと写像する、いわゆるメタファーが働く。

つまるところ、メトニミーとメタファーのメカニズムが相補的に機能しているのである。このように、物理的移動の意味から、意図や未来の出来事を示す文法マーカーへと変化する過程では、初期段階では再分析とメトニミーが、後期段階では類推とメタファーが機能しているのである。よって、メタファーとメトニミーは相補的な共存関係にある。メタファーはメトニミーに基づき、メタファーの動機づけがメトニミーであるということになろう。疑似法助動詞の文法化においてはメタファーよりもメトニミーの方が認知的基盤にあるといっても過言ではない。

メタファーは異なる領域間の写像を表すのに対し、メトニミーは同一領域内(フレーム)での焦点化・認知的際立ち度の問題である。よって、メトニミーでは起点領域にあったものが保持されるが、メタファーでは起点領域にあったものは消えるといった現象が起こる。上述したように、*be going to* において *go* の移動の意味がかりうじて保持されている点はメトニミーも働いている証左となる。*be going to* の文法化を辿ってみて、メタファーとメトニミーは別々に

機能するのではなく、両者とも経験的基盤に基づき、依存し合いながら機能するものであることがわかる。

よって、文法化を動機づけるものは、メタファーのみならずメトニミーもあるということになる。Heine *et al.* (1991:70-78) も「be going to の文法化はメタファーとメトニミーの相互作用の結果である。文法化の過程で語用論的推論というメトニミーが繰り返され、やがてメタファーによって意味拡張が起こった」と述べている。Hopper and Traugott (1993:87) も “In summary, metonymic and metaphorical inferencing are complementary, not mutually exclusive, processes at the pragmatic level that result from the dual mechanisms of reanalysis linked with the cognitive process of metonymy, and analogy linked with the cognitive process of metaphor.” といって、文法化においてはメトニミーとメタファー両者が相補的に作用していることに言及している。

さらに、文法化の過程で再分析が起こり「行く」という原義が薄れると空間移動の意味が失われる。そのため、もはや動作を表す動詞を後続する必要がなくなり、類推によって be going to は意味の弱化を伴い、like のように状態動詞を含むあらゆる動詞と共起するようになることは上述した。文法化するにつれて後続する動詞が多様になっていく。この現象は、類推によって新たな機能を生み出す「類推拡張」といえる。

ここで特記しておきたいことは、移動の意味は全く消滅されるのではなく、空間移動から時間移動というメタファーが起こり、時間軸上を移動中、移動途中であることを示すので、go の原義がかりうじて保持される、いわゆる「意味の保持化 (persistence)」(Hopper and Traugott 2003:3) の現象がみられる点である。go の原義「行く」が保持されて移動途中という意味になるために、be going to は go 以外の移動を表す動詞（例えば、be moving to, be coming to, be running to など）に置き替えることができないのである。つまるところ、疑似法助動詞は語彙的要素がまだ色濃く残っていて、法助動詞ほど未来標示の文法的機能が定着していない。まさに文法化の途上過程にあり、語彙的意味と文法

的意味が混在しているというわけである。

5. 文法化がもたらす疑似法助動詞と法助動詞の意味的相違

従来, be going to の文法化は, 空間の概念領域から時間の概念領域への変化であり, 時間を空間に見立てて捉える, いわゆる「空間から時間へのメタファー」つまり「時空間メタファー」であるといわれてきた。しかしながら, 本稿は, be going to の文法化の過程においてはメタファーのみならずメトニミーも重要なメカニズムになっており, メタファーの動機づけがメトニミーであり, 両者は相補的な共存関係にあるという立場をとる。

文法化の過程でメトニミーとメタファーが関与している現象は法助動詞 must の疑似法助動詞 have to にもみられる。I have something to read. の have は「～を持っている」という所有を表す本動詞である。これが, 再分析により I have to read something. となることで have to が疑似法助動詞化される。have to の文法化の過程では, have の「所有」の意味が中英語期に弱化され, 「持っている必要がある」から「義務を負う」(OED 2ed. 1989:125) というようにメトニミー的意味拡張が起こる。これによって, have to がチャンクとなり再分析される。さらに, 「持っている」という具体的な概念が「義務を負う」という抽象的な義務感や責任感を表す概念に写像しメタファーが起こり, 義務を表す疑似法助動詞の have to になる。主語が物理的に所有するという意味合いが薄れるにつれて, 話し手の主観的な所有, すなわち気持ちの持ち様を表す「～に違いない」という推量の意味が生じる。ここでも, be going to と同様, to 不定詞が意味の弱化した本動詞と一体化し, 疑似法助動詞としての地位を確立していった過程が垣間見える。また, have to の場合もメトニミーがメタファーの動機づけになっていることがうかがえる。

be going to も have to も主語の物理的移動・所有といった具体的な意味から, 話し手の意図や未来の予定や推量を示す文法マーカーへと文法化していく。その過程では, 再分析とメトニミーが初期段階で, メタファーが後期段階で重要な役割を果たしているのである。

- (6) a. “The phone is ringing.” “I’ll get it. Maybe it’s Brad.”
 (be going to は前から決めていた意図を表すが, will はその場でなされた決心を表す。)
- b. Is that lightening? I hear thunder. There’s *going to* be a storm.
 (稲妻が鳴っているのが兆候になって, 嵐になりそうだとやっている。)
- (Genius 6th 2023:890)

(6) a の will は発話時にとっさに思いついた意図であり, 発話時以前から予め決定していた意図を表す be going to とは異なる。(6) b の be going to は現在の兆候に基づく話し手の予測を表し, 単なる話し手の判断を表す will とは異なる。

前述したように, be going to は意味変化の過程で, be going という進行形に to 不定詞が後続していたが, 再分析が起こり疑似法助動詞となった。この文法化の過程でメトニミーとメタファー両方が関わっていた。進行形の be going は, 将来の出来事に向かって主語が時間軸上を移動している途中, すなわち移動の始まりと終わり (スタートと到着) を除いた移動 (ある出来事) の途中段階を示している。よって, もうすぐ到着するので, その手はずは整っている状況にあるという「前段階」⁹を暗示している。将来の出来事に向けての主語の有り様も同様で, 発話時以前から「前段階」があるがゆえの予め決定していた意図を表す。

- (7) a. I *have to* shave every morning.
 (会社の規則などからひげを剃る必要がある。)
- b. I *must* shave every morning.
 (毎朝ひげを剃らないといけないことを話し手が自ら必要と感じている。)
- (Genius 6th 2023:1362)

(7) a の have to は会社の規則という外的要因による義務, (7) b の must は話

し手自らの内的要因による義務を表す。have to は文法化の過程で、「を持っている」という具体的な概念が「義務を負う」というように義務感や責任感を表す抽象的な概念へと写像しメタファーが働くことは上述した。「義務を負う」には、話し手の内的な義務感だけではなく外的な義務感までの広範囲な意味を担う。また、have は「自らの領域に置く→所有」という物理的接触を表していたが、それにメトニミーが働くと「物事の関与→他者の関与」を表すようになる。これらは have to の表す義務が外的要因によるものであることを暗示している。

このように、文法化によって、具体的な概念が抽象的な概念に写像する際に特別なニュアンス（兆候や外的要因など）が生じ、再分析により新たな機能的・意味的要素が生まれるのである。will と be going to, must と have to の間に意味的相違があるように、法助動詞と疑似法助動詞間の意味的相違は、[本動詞 + to 不定詞] が疑似法助動詞へと文法化する過程でみられるメトニミーとメタファーというメカニズムによってもたらされることがわかった。

6. 文法化と事態把握

be going to の文法化の過程は、話し手が未来の事態をどのように認知し構造化するかに密接に関わっている。移動動詞 go の「行く」という意味は希薄になるが、移動の意味が全く消滅するわけではなく、go の原義は保持される。go の原義「行く」は「主語が時間軸上を移動している」を表す。元来意志を持った有生名詞の移動を表すので、通常行為を受ける主語には有生名詞がくる。つまり、animate agent が明示される。この go を使った be going to が文法化によって推量を表していく過程で、主語の意志の意味が希薄になり、無生物主語も許容するようになる。要するに、主語の選択制限がなくなっていくのである。人称制限がない現象は客観的把握の傾向が強いことを暗示している。

客観的把握とは「話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から

抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自分の分身を含む）事態を把握する」（池上2011:52）ことをいう。すなわち、認知主体は事態の中に身を置いていても、自己分裂したもう一人の自分が、事態の外に身を置き、観察者・傍観者として客観的に事態を把握し、自らをも言語化する。たとえば、(8)の例文のように、認知主体が自らを客体化させ、他者化するのである¹⁰。

- (8) a. I am sad.
b. You are sad.
c. He is sad

一方、日本語の「時空間メタファー」を表現する移動動詞は多様である。例えば、「間もなくクリスマスだ」の他に「クリスマスがやってきた」「クリスマスが近づいてきた」「クリスマスが迫ってきた」などのように、事態を時間的接近として捉えつつ、状況の推移を表している。第3節でも、時間を空間移動と捉える「時空間メタファー」には時間移動と自己移動があることに触れたが、時間移動も時間を経験する認知主体の自己が動くことを表す。その自己は、主観的把握型の日本語では、移動によって状況の推移・変化を表すことになる。それは、まさに時間に左右される体験的なものである。その際、主体はその状況の中に埋没される。これを主観的把握という。池上（2011）によると、主観的把握とは「話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする—実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする」（池上2011:52）ことである。すなわち、認知主体は事態の中に埋没され、自らの〈見え〉から事態を体験的に捉える。よって、言語化の対象から外れ表現化されない。これを「自己のゼロ化」（池上2000）という。自己が明示化されないので、1人称主語の省略が起りやすく、主語が2人称や3人称の場合は状況の変化や推移を体験的に捉えるかのように伝聞や証拠性の文法マーカーを駆使する。あくまでも傾向差はあるが、日本語はこの主観的把握

が相対的に広範囲で許容される言語であることを池上（2000:278）は示唆する。

主観的把握型の日本語には人称の選択制限がある¹¹。池上（2000:279）は、日本語の表現で〈主観的把握〉が目立つのは感覚・感情表現であると述べ、「感覚や感情といった〈非意図的〉（あるいは〈自発的〉）な営みに関わる主体を特別な形で言語化するということはあるのであるが、,,」（池上2000:280）として、以下の例を挙げている。

- (9) (1) a. (私ハ) 寒い。
 b. I am cold.
 c. Mir ist kalt. (=TO ME IS COLD)
- (2) a. ?? アナタハ寒い。
 b. You are cold.
 c. Dir ist kalt. (=TO YOU IS COLD)
- (3) a. ?? 彼 / 彼女ハ寒い。
 b. He/She is cold.
 c. Ihm/Ihr ist kalt. (=TO HIM/HER IS COLD) (池上2000:280)

日本語には人称制限があるから、2人称主語や3人称主語の場合、客観性を帯びるために伝達を表す終助詞や証拠性を表す文法マーカ―を付加する必要がある。一方、1人称の自己は事態に埋没されるから、終助詞を駆使して1人称であることを示そうとする。いわゆる自己性（エゴフォリシティ）の関与を示すのが日本語の特徴である。Tournadre and LaPolla（2014）は、エゴフォリシティの特徴をもつ言語には自己の関与の有無を表示する異なる文法形式があると論じている。証拠性の文法形式もこれに該当すると考えられる。自己性と証拠性の関連性についての詳述は次稿に譲りたい。

7. おわりに

本稿では、疑似法助動詞 be going to や have to のような [動詞 + to 不定詞]

が再分析を経て文法化する過程でメトニミーとメタファー両方のメカニズムが機能していることを論じた。すなわち、be going to も have to も主語の物理的移動・所有といった具体的な意味から、話し手の意図や未来の予定・義務や推量を示す文法マーカーへと文法化していく。その過程では、初期段階で再分析とメトニミー、後期段階ではメタファーが重要な役割を果たしている。従来、意味変化を引き起こすメカニズムとしてメタファーがよく取り上げられてきたが、実は、とりわけ疑似法助動詞の意味変化においてはメトニミーこそが主要なメカニズムであることを述べた。それにより、法助動詞とそれに対応する疑似法助動詞との間で意味的相違が生じる根拠を文法化の観点から説明するに至った。すなわち、文法化の過程で具体的な概念が抽象的な概念に写像する際に再分析が起こり、新たな意味的要素（兆候や外的要因など）を伴う。たとえば、be going to の場合 be going という進行形から文法化していくのであるが、その進行形が担う「前段階」という機能によって、will とは異なる意味内容を示すことになる。法助動詞と疑似法助動詞間の意味的相違は、[本動詞 + to 不定詞] が疑似法助動詞へと文法化する過程でみられるメトニミーとメタファーによってもたらされることがわかった。

さらに、なぜ be going to では go 以外の移動を表す動詞が用いられなかったのか、また、なぜ be coming to で未来を表せなかったのかといった疑問に対し、go が表す移動の意味は全く消滅されるわけではなく、進行形によって時間軸上の移動中、移動途中が示されるので、go の原義がかりうじて保持されるからであることにも触れた。メトニミーでは起点領域にあったものが保持されるが、メタファーでは起点領域にあったものは消える。go の「行く」という語彙的意味の保持化が認められるということはメトニミーが早い段階から機能していることを示している。要は、疑似法助動詞には語彙的要素がまだ色濃く残っており、法助動詞ほど未来標示の文法的機能は定着していないのである。つまり、文法化の発展途上にあり、語彙的意味と文法的意味が混在しているというわけである。

また、メタファーとメトニミーは別々に機能するのではなく、相補的な共存

関係にある。文法化を動機づけるものは、メタファーだけでなくメトニミーでもある。とりわけ疑似法助動詞の文法化において、メタファーの動機づけはメトニミーであり、メタファーよりもメトニミーの方が認知的基盤にあることも本稿で明らかとなった。

文法化によって新たな機能的・意味的要素が生じることから、文法化とは文法の変化にとどまらず文化や社会に適用するための変化でもあるとも考えられる。この点に関する十全なる論究は次稿に譲りたい。

<備考>

本稿および黒滝真理子（2009）『ドイツ語母語話者の言語表現における客観的把握の存否—言語類型論点観点からみた日英独語のモダリティ研究—』（『桜文論叢』第73巻）における分析の多くは、宮下博之氏（2008）の論稿『ドイツ語のような言語ではなぜ認識的意味への意味変化が生じるのか』（『日本認知言語学会論文集』第8巻）の記述を引用し、そこから得られた示唆に依拠している点を付言する。

注

1. 力動的モダリティ（dynamic modality）とは根源的モダリティ（root modality）ともいわれ、通時的にみてモダリティの起源となるもので、文の主語がもつ能力（can）や意志（will）を表す。束縛的モダリティ（deontic modality）とは命題の表す行為の実現に対する文の主語に課せられた義務・許可を表す。両者とも主語志向的（subject-oriented）である（Palmer 2001）。
2. 認識的モダリティ（epistemic modality）とは命題の蓋然性に対する発話時現在の話し手の査定（心的態度）を表す。推測や可能性を示し、話し手志向（speaker-oriented）である（Palmer 2001）。
3. 独語も英語と同様、印欧語の起源を辿るゆえ、「英語の must や can に対応するドイツ語の müssen や können といった法助動詞には、英語と同様に義務的意味から認識的意味への変化が観察される」と宮下（2008:620）は述べている。Gamon（1993）などによると、独語「müssen は、古高ドイツ語期から助動詞として『余地がある、許されている』といった意味で使われていた。晩期古高ドイツ語期になると、しだいに文脈的に『せねばならない』と解釈できるような用例が現れてくる。さらに中高ドイツ語期には、古高ドイツ語以来の許可の意味はまだ見られるものの、『せねば

ならない』の用法がその中心として定着したとされる。そして16世紀からは認識的意味の用法が見られるようになった。以上から müssen の意味は『余地がある』>義務的意味>認識的意味という方向で展開していったことが確認される」(宮下2008:620)。宮下(2008:623)も述べるように、「この類型がどの程度言語の個別性を作り出すのかに寄与している」ので、英語のみならず、「中高ドイツ語の資料に基づく詳細な分析を行い」、印欧語の類型論的特徴を論証していく必要がある。

4. メタファーはある事物の本来の意味と類似している別の事物で捉えるのに対し、メトニミーは本来指し示す事物と隣接する別の事物で捉える。たとえば、「働き手」は「手(hand)」という体の部分で「労働者全体」を指す。

OED 2ed. (1989:398) にはメトニミーの定義として以下のように記されている。

A figure of speech which consists in substituting for the name of a thing the name of an attribute of it or of something closely related.

メトニミーは「言葉のあや」とよくいわれる。対象となるものの名前を使わず、その属性で示すか、あるいは、密接に関連するもので示すからであろう。密接に関連することから「隣接性・近接性」という用語が使われた。一方、メタファーには「類似性」という用語が使われた。

Croft (1995) はフレームという領域における焦点化の観点からメトニミーを分析した。たとえば、「台所を手伝う」「台所が苦しい」「台所を任せる」など台所という場所が料理のフレームとして捉えられている。「手を貸す」というと手は体の一部であるが、体全体を差し出して手助けするというように、部分で全体を指示する。「その寿司屋は美味しい」といったら、「寿司屋」で「寿司のネタ」を表すように、入れ物で中身を示す。これらのメトニミーは空間的な隣接関係であるが、時間的な隣接関係もある。たとえば「手洗いに行く」という時、手を洗うのは事後の行為で、まずトイレに行って、用を足して、手を洗うというような直列的な時間を表すメトニミーである。「袖を濡らす」という古典語も「泣いた」結果として「袖が濡れる」という因果関係が示されているといった意味で時間的なメトニミーの一種である。これらの例のように、そのフレームの中でも知覚的に目立つもの、プロファイルされるもの、参照点として選択されやすい現象、すなわち認知的際立ち(cognitive salience)の高いものが表現される(Langacker1993:199)。

このように、メトニミーが「言葉のあや」とよくいわれるのは、本来の意味と指示している意味のズレがみられるからである。

5. その一方で、時間表現から空間表現が生じるという解釈があっても不思議ではない。事実、「時空間メタファー」説を否定する立場(Traugott and Dasher2002)もある。
6. ME とは moving experience の略語である。
7. 文法化(grammaticalization)とは、内容語(動詞や名詞など語彙的内容を持つ要

素)が機能語(語彙的内容が希薄な助動詞や前置詞・助詞など)へと通時的に変化することをいう(辻編(2002), 231:「文法化」)。文法化には、「意味の漂白(semantic bleaching)」、「文脈の般化(context generalization)」、「脱範疇化(decategorization)」、「音声的縮約(phonetic reduction)」という4つのプロセスが関与している。

8. 「漂白化(bleaching)」(Hopper and Traugott 2003:94-98)とは、文法化の過程のうち、本来の具体的な内容を持つ語彙的意味が抽象化・一般化していく意味変化(辻編 2002:46)を指している。語形の短縮を伴うのが一般的である。文法化の初期段階に「般化」が起こり、その後、「漂白化」が副次的に起こる。
9. 進行形の「前段階」性については、佐藤(2014:101)が「進行形が表す状況には必ず基準時以前の状況(=「前段階」)が認められる」と主張している。発話時以前から顕在する意図や兆候を「前段階」という。
10. 池上(2000:280)にもドイツ語の例が提示されているが、同じ事柄に対して主観的把握／客観的把握という異なる捉え方をするといった事態把握の類型論的特徴は日英語だけではなく、ドイツ語にもみられる。ドイツ語は、英語同様、客観的把握である。

宮下(2008:622)は「(13) a. 私はうれしい。 b. ?彼はうれしい。 c. 彼はうれしがっている・らしい・ようだ」といった感情表現に対し、「(14) a. Ich freue mich. 直訳:私はうれしい。 b. Er freut sich. 直訳:彼はうれしい」とドイツ語の例を挙げ、「ドイツ語では認識的意味を言語化せずに、聞き手がそれを補うことが頻繁に行われる。それに対し日本語は、認識的意味を言語化する傾向のある言語と特徴づけられる。.....日本語では3人称の心情について述べる際に証拠的もしくは認識的標識が必要であるが(13c)、このような制限はドイツ語には見られない」と述べている。

11. 本稿は疑似法助動詞の文法化について述べてきたが、日本語の人称代名詞にも文法化現象がみられることに触れておこう。とりわけ、1人称や2人称の代名詞は文法化の起点領域になりやすい。なぜなら、話し手や聞き手は常に発話に関与しており、使用頻度が高いからである。使用頻度が高い語は文法化されやすいのである。一方、3人称代名詞は文法化の目標領域になりやすい。3人称代名詞が定冠詞や指示詞という文法的カテゴリーによって再解釈されることが多いのは、文法化の目標領域にあるからである。金水(2003:39)には「江戸時代以前の資料に現れた「持つ」の主語には無生物が現れることが極めて少ない」という指摘がある。通時的にみても、そもそも3人称を主語にする表現は江戸時代までほとんど存在しなかったわけで、文法化の目標領域にあったと考えられる。人称の文法化の詳細については稿を改めることにしたい。

参考文献

- 池上嘉彦(2000)『「日本語論」への招待』講談社。
 池上嘉彦(2011)「日本語と主観性・主体性」,『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』49-67, ひつじ書房。

- 金水敏 (2003) 「所有表現の歴史的変化」『言語』 32-11,38-44.
- 佐藤健児 (2014) 「進行形の「前段階」性について」『英文学論叢』 62,99-119. 日本大学英文学会.
- 本多啓 (2011) 「時空間メタファーの経験的基盤をめぐって」『神戸外大論叢』 62(2):33-56.
- 宮下博幸 (2008) 「ドイツ語のような言語ではなぜ認識的意味への意味変化が生じるのか」『日本認知言語学会論文集』 第8巻 .620-623. 日本認知言語学会.
- Barnden, J.A. (2010) “Metaphor and Metonymy: Making their Connections more Slippery.” *Cognitive Linguistics* 21(1), 1-34.
- Bolinger, D.L. (1977) *Meaning and Form*. London: Longman.
- Croft, W. (1995) The role of domains in the interpretation of metaphors and metonymies. *Cognitive Linguistics* 4(4):335-370.
- Dirven, R. and R. Pörings (eds.) (2002) *Metaphor and Metonymy in Comparison and Contrast*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Fillmore, C. J. (1982) “Frame semantics.” In *Linguistics in the Morning Calm: Selected Papers from SICOL-1982*. Seoul: Hanshin. 11-138.
- Gamon, David 1993. On the development of epistemicity in the German modal verbs *mögen* and *müssen*. In *Folia Linguistica Historica* 14, 125-176.
- Heine, B., Cjyylaudi, U. and Hünemeyer, F. (1991) *Grammaticalization: A conceptual framework*. Chicago: The Univ. of Chicago Press.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott (1993) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Hopper, P.J. and E.C. Traugott (2003) *Grammaticalization*. 2ed. Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. Univ. of Chicago Press. (渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸訳 .1986. 『レトリックと人生』 大修館書店)
- Lakoff, G. and M. Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh: The Embodied Mind and Its Challenge to Western Thought*. New York: Basic Books.
- Langacker, R. W. (1993) Reference point constructions. In Ronald W. Langacker 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin: Mouton de Gruyter, 171-202.
- Moore, K. E. (2006) “Space-to-time mappings and temporal concepts.” *Cognitive Linguistics* 17. 199-244.
- Palmer, F.R. (2001) *Mood and modality 2nd*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Sweetser, E. E. (1990) *From etymology to pragmatics*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.
- Tournadre N. and LaPolla R. J. (2014). “Towards a new approach to evidentiality”. *Linguistics of the Tibeto-Burman Area* 37(2): 240-263.
- Traugott, E.C. and Dasher, R.B. (2002) *Regularity in Semantic Change*. Cambridge: Cambridge Univ. Press.

引用文献

辻幸夫編（2002）『認知言語学キーワード事典』研究社．

南出康世・中邑光男（編）（2023）『ジーニアス英和辞典第6版』大修館書店．

John A. Simpson（著）・Edmund Weiner（編）（1989）*The Oxford English Dictionary*,
2ed. オックスフォード大学出版局．